

埋蔵文化財調査室ニューズレター

北大構内を流れるサクシュコトニ川、及びセロンベツ川は、市街化により改変され、現在、埋没・枯渇していますが、かつてはその水源である湧水とともに、産卵床があったとみられサケが遡上していました。人類のサケ利用の歴史は古く、ヨーロッパでは後期旧石器時代後半まで遡り、日本列島でも約1万5千年前の東京都前田耕地遺跡からサケ科の骨が発見されています。サケの捕獲方法は多様ですが、定置漁具は、川などの一定の場所に杭列を設置することにより、魚の遡上を妨げ、あるいは誘導して捕獲するための施設です。杭列は、杭と横木を組み、柵状の施設を作りますが、これには様々な樹木が加工して用いられています。そのため、定置漁具は往時のサケ漁を知る手掛かりであるとともに、樹木を利用した人々と環境との関わり(植生史)の一端を明らかにする貴重な資料でもあります。本特集では、北大構内遺跡から発見された定置漁具について、紹介していきます。



K39

5m 6m

1

40cm



()

(8 12)

()

